

昭和
和和
二十四
四十四
四年
十七
月二十
三
日
第三
行
(種
月郵
一便
回物
・十五
行)

(通第二四五号)

次

微笑の聖人
歎異抄第二章に就いて
池山栄吉……(1)

目

63.7.27
⑨
母を憶う
池山寿夫……(7)

歎異抄第七章
花田正夫……(17)

慈光

第二十一卷
第十号

微苦笑の聖人

……歎異鈔第二章に就いて……

池山栄吉

「哀れなるかな、恩顔は寂滅（じゃくめつ）の煙に化しまうといえども、真影を眼前にとどめたまう。悲しいかな、德音（とくいん）は無常の風にへだたるといえども、実語を耳の底にのこす」

生れて祖師御在生の時にあわず、和顔（わげん）を仰ぐことの出来ないのは遺憾のきわみであるが、幸いなるかな耳の底に残る愛語は、髣髴（ほうふつ）として温客を想見せしめるものがある。

この見地から歎異鈔第二章を拝読して、そこに現れる聖人のお姿を見入ってみよう。

全体を通じて優しさのあふれんばかりの情調の中に、相手の身心を浸透（しんとう）する白熱的意気込を感じる。それはせっかく光明名号の父母の間に生れた信心の子を、法の魔障、仏の怨敵（おんてき）の手からとりもどさ

ずにはおくまいという潑刺（はつらつ）たる生気のほとばしりである。

聖人の前には、歩みを遼遠（りょうえん）の洛陽（らくよう）にはげまして関東からたずねてきた同行衆が、やれやれ日頃の念願がかなったという大満悦の面持（おももち）で、今はじまるお話に全身を耳にし、固唾（かたず）を呑んでひかえている。

聖人はやおら悠揚（ゆうよう）せまらず、諄々として語り出される。その一言々々には満腔の力がこもっている。そして又その一声々々はなみいる人達にとってどんなに懐しいひびきであつたらう。

聖人はすこぶる真面目にじっと一坐を見やりながら
「おのおの十余ヶ国のさかいをこえて、身命（しんみよ

う）をかえりみずして、たずねきたらしめたまう御ころざし、ひとえに往生極楽のみちをといきかんがためなり」

と、まず純粹的な動機への集中をうながす。これは聴者の居すまいを正されるのである。

信仰はその対象と面とむかつて坐らないと聞かれない。これも他山の石の一つである「美しい魂の告白」（ゲエテ著）のヒロインがその獲信の告白の中で「ああ神様、どうぞ私に信仰を授けて下さい、と私はあらん限り氣をはり、心を引きしめて祈った。私は傍の小さい車子（テーブル）にもたれ両手で泣き濡れた顔をおさえていた。この時私は神様が私達の祈りをきいて下さるには、どうでもそうなくてはならない状態、しかし滅多にそうはなりきれない状態にあったのだ」と云っている状態、そうした心の向きこそ対象（たいしょう）への正坐、すなわち一心正念というものである。

「ひとえに往生極楽の道をといきかんがためなり」ただ「まことの信心を得たいためであるからには、外に心を散らし氣を移さぬようにと、かたがた念をおされるのである。

聖人の気色は一層の緊張を加える。

「しかるに念仏より外に往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんところにくくおぼしめしておわしましてはんべらんは、大きなあやまりなり」

救いの種は念仏一つ、そのほかに何か知っておく必要があろうなどと、そんなことに心をひかれては駄目、ただ信心を要とすべし、そのほかをばかえりみるな、と目の附けどころ、ねらいの的（まと）を指定される。

「もししからば」と、聖人は口辺にかすかに笑いをたたえて続けられる。

「南都北嶺にもゆゆしき学生たち、おおくおわせられて候なれば、かの人々にもあいたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり」

知るがめあてなら此所へ来るのはお門違いと、凛（りん）とした断言にともなう微笑には、幾分からかい——是非ここでというお望みなら御覧にいられてもよいが、とおのがふところをのぞくような——の氣味をおびてはいるが、苦笑の影はまださしてない。それはそのはず、まだとつときを出さずにいるのだから。これさえ出せばなんぼなんでも落着くところへ落着かすことが出来よう、との期待があるから。

さていよいよとつときを持出される段になる。聖人の御

様子はがらりと一変する。聖人のかつての——そして今もなおそのまま続く——自己に沈潜したまう。そしてその自内省の境から虚心坦懐（きょしんたんかい）ありのままに告白された信体感が

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをこうむりて、信するほかに別の子細（しさい）なきなり」

の声明である。もしこの時、まともに聖人のお姿を仰いだ人があったなら、その人はおそらく大寂定（だいじやくじょう）にいらしたまえる釈尊を瞻仰（せんごう）（せんごう）して、希有の光瑞（こうずい）を看取し得た阿難のころよさを味わったことであろう。

聖人はその昔、吉水の禪室で法然上人と対坐してこのころよさを感じ、その容（かたち）を見れば法然上人、その声をきけば弥陀の直説（じきせつ）という「よきひとのおおせ」にあわれた。

月を中心にして地球と太陽とまっすぐにならんだ時、その線上の一定の地点から月を仰ぐと、皆既蝕（かいしきしょく）もしくは金環蝕（きんかんしょく）の光景に接して、月の周囲に太陽の光線の一異象であるところの銀霧、紅炎のうす巻きみなぎるのを望見するであろう。聖人は上人を

通して、この銀霧、紅炎を拝した。それが即ち「ただ念仏である。」

ついでに一言しておくが、念仏の口に出にくかった私をはじめ「念仏もうさんと思いつ心」の起こった時は、この「親鸞におきては」の御文にひきこまれた時であった。ああ本當の信仰が欲しいな、と思いつめた刹那、胸に浮んだこの御文に驚かされて、ああ聖人もそうされたのか、ただ念仏してか、じゃ私も、と聖人の口真似をして、思い切って一声「南無」と言いかかった時、——そしてまだ「阿彌陀仏」と云いきらないうち——未曾有（みぞう）の心境光の滝を浴びせられた、とても云うよりほか言いようのない気持ちになって、止めどなく念仏が出る。しばらくしてから、ああこれが信仰かとおのずからうなづけたのであった。何のことはない、聖人と声を合わせて念仏をしかけたら、何時の間にやら聖人のお姿は消えて、如来の光明の直射にふれた、といったおもむきであった。

聖人は更に話頭を転じて、慨然（がいぜん）として語りつづける。その語気と表情には沈痛な自嘲（じちょう）の気色が動く、

「念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるら

ん、また地獄に落つる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念仏して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからずするう。その故は、自余の行をばけみて仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめいずれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし」

これはさきの「念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと云々」に照応して、一つには「総じてもて存知せざるなり」で、わが無智を再認識し、また一つには「いずれの行もおよびがたき身なれば」で、わが無能を自認した。だから、早く自力作善の見地から一躍して「ただ念仏」の信界へ飛びこめよとの勧めである。踏切り地点の指摘である。そしてかの

「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具是の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけり」

と第九章にある聖人の御述べこそは、正しくその踏切りの最後の動機たるべきものである。

聖人のお顔が急に晴れわたる、雲間を出る月影のように明皎々（めいこうこう）として、この世なぬら聖らかさにかがやく。真に光顔巍巍（こうげんきぎぎ）の言葉そのままである。この威容顕曜の中から玉音はがらかに語り出たもうたのが。

「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教虚言（きょごん）なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然のおおせまことならば親鸞がもうすむね、またもてむなしかるべからずそうろうか」

という「如来の御代官」としての啓示である。つい今のさき「総じてもて存知せざるなり」と弱音を吐いた人の言葉として、何たる雲泥の懸隔（けんかく）であるう。先は自見の立場からの歎声であり、これは信界のうちからの呼びかけであるからで、かの銀霧、紅炎を親しく瞻見（けんけん）した人にしてはじめてあえてなし得る宣言である。

聖人は言おうと思われたことを云い終えられた。今まで支配した緊張がおのずからゆるむ。それは当然である。しかるに何事ぞ、または御気色が憂鬱（ううつ）にかけるではないか「詮ずるところ愚信の信心におきてはかくのごとし。こ

のうえは念仏をとりて信じたてまつらんと、また捨て
んとも面々の御はからいなり

「せんずるところ」と、いよいよ末尾の一段にとりかから
れて、再び一座を見まわされた聖人は、おそらく太息（た
いそく）と共に「このうえは」と吐き出すように仰言った
と推測せられる。聴者の様子に聖人の期待にそわない節が
多いからである。山と盛られた信心の引出物に差しのべら
れる手がすくないからである。

「面々の御はからいなり」痛切骨を刺す皮肉と聞こえ
る。私はここに聖人の微笑を拝見する。一体はからいは
他力信仰のうらはらである。たとえば歎異鈔第十一章に、
「つぎにみずからのはからい」をさしはきみて、善惡のふ
たつにつきて、往生のたすけさわり、二様におもうは、
誓願の不思議をばたのまずして、わがところに往生の業
をはげみて、もうすところの念仏をも自行になすなり」
とあるように、また同第十六章に、

「信心さだまりなば、往生は弥陀にはかられまいらせて
することなれば、わがはからいなるべからず……しかれ
ば念仏ももうされそうろう。これ自然なり、わがはから
わざるを自然とはもうすなり、これすなわち他力にてま
します」

「この人すでに空曠（くうこう）のはるかなるところに
いたるに、さらに人物なし、おおく群賊悪獸あつて、こ
の人の単独なるを見て、さそい來つて殺さんと欲す。こ
の人死をおそれ直ちに走りて西に向うに、忽然として
この大河を見る。すなわち自ら念言すらく云々」なお重
ねて「時にあたつて惶怖（おうふ）することまた云うべ
からず、即ち自ら思念すらく云々」最後に「この人すで
に此所に遣（つか）わし、彼所に喚（よ）ほうを聞き
て、即ち正しく身心に當つて決定して、道をたずねて直
ちにすすんで疑怯退心（ぎこたいしん）を生ぜず云々」
とある。

その「念言すらく」「思念すらく」「決定して」とある
のが即ち獲信直前のはからい、念仏もうさんとおもいたつ
ころへの踏切りである。

けれども相手がここまで進んで来ないで、そのはるか手
前のあたりでぐずぐずしているのでは、聖人のまじめで仰
言る「面々の御はからい」という言葉も、いやでも応でも
皮肉と聞こえ、反語とひびかざるを得ない。行く手に幸あ
れと名残りを惜しむ馬の驢（はなむけ）にすぎない。それ
は聖人の御本意にそむくこと遠して、聖人の微笑は「親
鸞は弟子一人もまたずそうろう」のたよりなさと、それを

とあるように、はからいの反対が自然であり、他力であ
り、無義為義であり、信仰である。そして信仰それ自身は
ひとえに弥陀の御もおしにあずかるもの、如来よりたま
わるもので、わがはからいでわれに得られるものでもなく
人に与えられるものでもない。

しかし聖人は必ずしも皮肉、反語として面々の御はから
いと云い放つていられるのではない。おもうに聖人が衷心
希望してお勧めになるはからいとは、念仏取捨の決意とし
て獲信（ぎやくしん）の途上、唯一のゆるされたるはから
いであろう。即ち信仰への決定的一歩「念仏もうさんとお
もいたつ心」である。それつまり矜哀（こうあい）の引
入であったとは、あとから気付くはからいで、この意味で
のはからいは、単に許されたというばかりではない、なく
てはならない必然の過程である。

たとえば歎異鈔第十六章の廻心（えしん）の条に
「この廻心とは、ひごろ本願他力真宗を知らざるひと、
弥陀の智慧をたまわりて、ひごろの心にては往生かなう
べからずとおもいて、もとのところをひきかえて、本願
をたのみまいらすをこそ、廻心とはもうし候え」
とある。その「とおもいて」というのがそれである。
またたとえば二河白道の譬喩の中に

裏つける「弥陀の御もおし」の心強さの融合感である。
こうした感じを積極的に云いあらわされたのが「教行信
証」の総序文の終末の御文である。

「ああ弘誓の強縁多生にももうあいがたく、真実の淨信
は億劫にもえがたし。たまたま行信をえは遠く宿縁をよ
るこべ、もしまたこのたび疑網（ぎもう）に覆蔽（ふへ
く）せられなば、かえりてまた曠劫を逕歴（きようりや
く）せん。まことなるかな撰取不捨の真言、超世希有（ち
ょうせけう）の正法、聞思し遅慮することなかれ」と。
聞思して遅慮することなかれ「これこそ聖人が衷心希望
していられる「面々の御はからい」なのである。

聖人の微笑にまじる苦の影を消して、こころよいそれ
に代わらせる、それはひとりそのかみの関東の同行はか
りでない、聖人の信仰にあこがれる人皆の念願でなくて
はならぬ。

——「仏と人」より——

絶対他力と体験

池山栄吉著

実費頒布、三百円。送料共。

京都市右京区山田開町、淨住寺

母を憶う

池山 寿夫

池山でございます。花田さんからのおまねきによりまして又皆様にお目にかゝれる機会が与えられたわけでございますが、この前にも申し上げましたように、私は慈光にも信仰講話としてございましたが、そう云う立場におけるお話の出来る人間でもないし、又その資格が無い者であります。ただ花田さんと父を通して大変深いお導きにあずかっておりますので、その御縁としてこういう事になるんでございます。私考えましたが、結局平常懈怠(けたい)の限りを尽くしている私にとって、これが私自身の御導きになると、私自身がこう云う事によってみちびかれて行くのであると、大変ありがたく思う次第であります。決して今日ここへ伺いまして皆様のお心のお導きになるようなお話をしたいと言うそんな気持は全然ございません。ただまいりまして私の思うままに話させて頂く。で、それを以て自分自身のお導きにあずかる御縁にしたいと、こう思う次第であります。又事実そうなっているのでございます。

が男の子でその下に妹があつてその下に母がいた三人きょうだいで、一番上の兄をずっと学校へやっただんですが、学校へやっている内に何時行かせられなくなるかわからん、したらお前をたたき売らんだと云って、母の小さい時から色んな芸事を仕込んだんだそうです。それで母もその氣になつて、兄さんが学校へ行けなくなつたら私は芸者になるんだと、その氣持だつたそうです。それで死ぬまでうちには三味線がひとさおりましたが母は本当に芸事が堪能でした。殊に常盤津が得意でしたが、そう云う風に仕込まれた關係もあつて負けん氣で、非常に涙もろい弱い面もあったのですが強い面もあると云つた人でした。

で、私考えますのに、父もよく云つとりますが父が本当に信仰的の生活にはいったのは、父自身の言葉によれば四十を過ぎてからで、それまでは云わば真宗びいきのドイツ語学者という立場にあつたと自分でも云つとります。母なんかは宗教的匂いはそれまでは殆んど無かつたような人でした。これはどう云う事情だか子供でも深い事情は知りませんが、高等学校の教授と云えば当時まあ／＼先生仲間では大学教授に次いで地方としては学者としてあつたかわれたもので、生活程度まあ／＼相当な事が出来た筈なんです。ところが私の小さい時から中学校を終わる位までうちは経済的に緊迫しておりました。どうしてだか今でもわからない

最新号の花田さんのあの慈光に、皆様御覧下さいましたでしょうが私の母の手紙がのせられております。私の数え年十九の年ですからもう今から五十年近くの前の手紙でございます。あれをこないだ私も拝見しまして、何十年かぶりで母の手紙を読んだ事であります。まあこれを御縁として母の事を少し聞いて頂くかと思うのでございます。母は数え年三十九でなくなりました。私が数え年十九の時ですから今の年令で云えば十七の年であります。当時高等学校の一年生でありました。

私の母は代々の江戸っ子で、母方のお祖父さんは武士でしたが江戸詰めの武士だったので、ずっと江戸で住んでチャキ／＼の江戸っ子と云うような人でした。せいはあまり高くなかつたんですが、今の言葉で云えば大変氣ツツの切れた負けん氣の女でした。明治維新の世上の色んな変化に武士の禄を召し上げられてそして生きて行かなければならぬ母方のお祖父さんにすると大変な心配があつた。一番上

いのです。(父) (母) 父もいないし母もいないしそんなにぜいたくな生活していたのでもなし、どうしてあんなに母さん困っていたんだらうと思うんですが、それは私が考えますのには屹度父が高等学校につとめる前に御承知のようにドイツから帰つて来て社会事業的のある事業をいとなみ、それが色んな事ですっかり駄目になつてその余波がずうっと続いて、色んな始末しなければならぬ物があつたんだらうと思うんです。今の想像ですけれど。母は泣きごと一つ云わず一生懸命やつてましたが、私の小さい時心に残っている母と言うと、子供や主人に色んな物を食べさせても自分がお膳の時には母さん何だつて食べないんだと思われる位おこやおみおつけなんかですましちやつて、さあ／＼と云つてたすきがけになるような母でした。そして、それ迄に父の話や何かを時折聞いていたんだらうと思うんです。けれども深くそれを心に受け止めてありがたがる母では断然なかつた。ところがあの手紙に書いてありますようにどうも体の健康が悪い、胃が悪い、リュウマチの薬の加減で悪いと思つていたがどうも胃がいかに。で診てもらつたら胃癌だつた、と云う一瞬ですね。それから母は岡山県病院からうち迄、歩いて女でなら小一時間かかる、少くとも四十分間かかる。そこを、当時の胃癌、しかも大分病状がすすんでいると云う、今なら手術だとか何とか云う事があると

してもその当時は癌と云ったら頭から死と決めてたんですから、死の宣告を受けて歩いて帰って来た。それはやっぱり負けん気の母の姿がそこにあるんじゃないかと思うんですが、帰って来て長男の私と妹にその事を云われ、あの手紙には二三日はどうにもならなかった、主人は悲しむし子供達は不幸を詫言るしと云うような意味がありますが、実はあれは私の妹は実際泣いて、当時高等女学校で、母の膝に取りすがって泣いていたのをおぼえています、私は実はそんな事は無かったんです。あれは母が私をかばってくれて、らくは泣いてくれて寿夫は泣きませんでしたと書けなかったから子供達はと書いたんです。私は泣けなかったんです。腹が立っただけです。実は……十七才と云うと今頃は反抗期とか何とか云いますが、昔からそうなんです。話が横へそれますが反抗期と云うのは、私の考えですがどういう事かと云うと、人間がだん／＼成長して来て何か自分のものをつかみたいと云う時へはいる期なんです。何か自分のものを持ちたいというところ迄行くんです。だけどそれがまだつかんだものが無い時なんです。押し付けられないで自分のものを持ちたいという気持ちだけあって自分のものはない。自分のものをつかみ得た時には人のものと落ち着いて対応することも出来るし、あなたもそうですか、私もこうですよと云う余裕も出来るし、色んな比較検討す

ることも出来る。けれども自分のものが欲しいなと思いがらまだ何も無いアクセクしているところへ押し付けられると、イライナイ、イライナイとなる。これが反抗期だと私は思っているんです。反抗期というものは何ものかを求める成長の過程であって、決して頭から困ったもの扱いする事じやないと思っています。どうも当時私はそう云う年代でもあったのかもわからないが、一種の反抗を感じました。何だと、まだ癌だかわからないじゃないかと。それまで母はわりにピン／＼していたんです。自分で云うとおかしいけれど、まあ母は美人でしたからあんまりやつれて見えないし、まだわからないじゃないか、それを父さんと母さんは色々話してる、そしてありがたいありがたいと云っている。何ありがたいんだ！と云うような気持ちがムラ／＼と起って来たんです。

で、私が本当に慌て出してそしてもうドギマギしたしたのは年があけて一母が死んだのは五月でございしますが二月頃からです。母が目に見えて衰弱し出した。これは本当に死ぬんじゃないだろうか、そう云う事があり得るんだろうかと、と、全くもう何と云ったらいいか知れない気持ちに追い込まれた。それからです、私が母の死と云うことと直面し出したのは。

今その間の事をお話すれば色々ありますが、私は二つの

一生忘れられない事が残っております。

一つは母が「寿夫、歯をなおさないでよかったよ」と云うのです。母は多くの子を生みまして歯が非常に悪かった、当時のことで健康保険とか国民保険とかいうものは何もない、かかればそれだけお金を払わなければならぬ。母にしてみれば子供が五人もいましたし色んな欲しい物や買っただけのものが沢山あったらと思う。それにさっき云ったような関係もあったんだらうと思う。本当にしみ／＼とです。母が、死んで行く母がですねえ、ああ歯をなおさないでよかったと云う。その時私はドキ／＼としました。一生その言葉を偉大な言葉だと思ってるんです。お返しを使わなくてよかったよと、私はどうせ死んで行くんだから、歯をなおさなくてよかったよ、母親以外のものが誰が云ってくれましょう。これが母親だ、偉大なものだと思います。

もう一つは……どうもいけませんねえ、これは……（先生涙でしばらくお話がとぎれる）三月頃でした。こたつがあつて、私は試験勉強で早くねられないから、当時の生活は今のようにならなくなるとこたつのある部屋へあたりに行くんです。そうすると、父も寝ている、子供もみんな寝ているのに母がじつとあたっている。で自然に母とさしむかいで

こたつにあたる。何も母も云わない、私も云わないが、こたつに向い会ってじつと母の顔を見てみると、もう本当に憔悴（し／＼）している。その母をじつと見ているうちに私の気持ちがぐう／＼とこみあげて来て、そしてつい下を向いて、母の前では絶対泣かないゾと思っていた私が涙をこぼしたらしい。それを母がめざ／＼と見付けまして、「何だね寿夫」それから私もつい「母さん、僕まだ何にも母さんにして上げられなかったのにね」と云った。と、母の鉄火のような言葉がはねかえって来た。「バカだね、お前は、バカだよ。何かしてもらおうと思っただけ子供を育てる親なんてありやしないよ、バカだよお前は」頭から叱った。よく悪い言葉は人を傷つけると云う。実際ですね、刃物だけで傷つけるのがきつ／＼つけない。心ない言葉のひとことは深く心にきずをつけてね。そのひとことのきずを負って行く人がある。負わせて行く人がある。きずは刃物だけじゃない、言葉でもある。まあ言葉も色々あるが、馬鹿と云う言葉が一番悪い言葉ですわね。馬鹿と人から言われてごらんさい。ところが私はお前はバカだよ、バカだねと云うそのバカに一生抱かれ続けて六十何年生きて来ましたその時の母の言葉の調子、これはもう先程始め申しました江戸っ子の言葉でしたが、愛情はもう本当に私を包み一生包んだ。

よく父は、人間の持つ愛情とか何とか云うけれど、そうだねえ、母親の愛情というものがまあ／＼「一番絶対に近い」のかねえと云う事を時々話しました。私もそう思います。

私の話はどこへ飛ぶかわからないのだからどうぞそのおつもりでお聞き下さい。私は随分子供を可愛がっているつもりだけれど、私の家内にこいつは負けたと思った事があります。それは何かと云いますと、一年半ばかり北米で家族収容所に収容されていて、昭和十八年の戦争最中交換船に乗ることになった。ニューヨークまで出てそこで交換船に乗る事になった。それまで長い三日ばかりかかる汽車旅行でしたが、テキサスから出てニューヨークへついた。それ迄に番号札が一人ずつ子供に至るまでつけて両方の人員をちゃんと合わせて交換するんです。でニューヨークの汽車から降りて埠頭までバスに乗せられて、いよ／＼船の所へついて最後に番号と照らし合わせて出す。ところが、私が行って次に家内が行く、その次に長女の蓮子が丁度七つ位、ふと見たら札がないんです。何処へ落としたのか無い。それであとまわしとなる、こいつは困ったと私はあわてましたよ。で係りの人にまあ子供の事だからよく落とす、他の二人の子供は持つてると言う、イヤそれは駄目だ、私の役目は札を見る事だ、子供か、夫か、妻か、そんな事を見る役目じゃないと云うのです。そう云われればそ

すが、あの手紙で見ますと、如何にも母はそれこそ慈悲の船に乗って何も彼も安んじて逝かして頂けると云う面が強く出ている、又これもうそではございません。けれども死ぬまでそれこそ本当に苦しんだらうと思うんです。五人の子供を残して逝く、その氣持が私今わかるんです。どの位苦しんだことか私今になってわかります。弟にしても妹にしてもまだ幼かった。母は所謂心を残して逝ったことにはちがいない。世の中には私は小さい時に母親に別れたから母親の愛は知らないという方もあります。そりゃ御本人は知らないかも知れないが、その時お母さんが深い悲しみと、それから何と云いますか思いを残して逝って事は間違いないんであって、自分が知らないだけで、どんな小さい時に別れたにしろ母親の心というものを受けてない人間というものは無いと思うんでございます。

それで私は母が死にましてから、色んな事で母の姿を通して、何と云いますか信仰らしいところへ結ばして頂いた。これが一番どう云うところからかと言うと、母はいよいよ五月十三日に死ぬんですが、四月の始め頃からパタッと床についてしまった。そして腹膜炎を併発しておなかがかんになる。水をとるとバツとペしゃんこになるんですけれど、取らないとこんなになって苦しがる。当時母の背中をさすって居ながらああ母は可哀相だなと感じたんです。

れ迄です。私はあわてました、どうしよう、オド／＼した。そしてちょっと家内の顔を見た。そしたら私は負けたと思ったんです。その時実内は子供をしっかりこうかかえて笑っている。その顔には、もしこの子がこれで帰れないのなら私も残りますよ、何も心配する事は無いんだ、子供だけ残しちゃいないんだと云う母親がそこにあり／＼と出てるんです。私は困ったナ、若しも別々にならなければならなかったらどうしようそんな事はばっかり考えてるんです。ところが母親はそんな考えはさりと無い。子供が帰れなかったらそれまでですよ、私もついてますよと、泰然自若としての母親の顔を見まして、これは負けたナと思っただんです。今日家内が来てないから話すんですけどね、家内にはまだ話してないんですけど、私はその時家内に負けたと思いました。マアその時はあとで点検したら札が一枚落ちていたそうで持ってきた。まあそう云う事もある位で、とにかく私はその後ずっと母と云うものがありがたさを事ある毎に感じさせて頂いて生きて来て居ります。

私が母が死んだ時に一番可哀そうだと思ったのは、私は数え年の十九迄母と一緒に来たんだけれど下にいる四人の弟妹はまだ幼いが可哀そうだなと、本当にしみ／＼思いました。けれどもこないだうちへ来た弟とも一寸話したんで

何故かと云いますと、母にしてみると私は五人の子供の一番上なんだから、いわゆる長男というものは一番母と一緒になってる、共にあるもの、まああえて言えば自分を愛してくれてる者と思っている人間にちがいない。その私が母の背中をどう云う氣持でさすっているか、あゝ疲れたなあと思う時はありやしないか、もうやめたいと思う時はありやしないか、当時私はテニスの選手をしていましたがああテニスに行きたいなあと思う時はありやしないか、もう困るナ勉強しなけりやならないんだがと思う時はありやしないか。あれを思いこれを思いそんな事を思っている時はかりなんです。しかるに母はこの私を一生懸命自分の事を考えて背中をさすってくれると思ってる。可哀相だなと私は思っただんです。これが人間のすがたかしらんと思っただんです。母は一人じゃないか、長男の私がこんな氣持になってるのを母はありがとうと云ってくれる。人間と云うものは一人だナァと。それから母がなくなってから色んな事を考えさせられたんです。結論的に云えば自分も同じであるところへ、そう云う自分なんだから、その自分も亦絶対的に自分を愛してくれ絶対的に奉仕してくれる人間を求めたって無理なんだと。そうするとオレは一人なんで、その一人のオレはどうしたらいいんだと云うところへぶつかったわけであります。そうして、それから色々何したんですが、結

局結論的に云えば、母がよろこんで阿弥陀様というもののお膝に抱かれて死んで行った、それ迄は父が近角先生と共に弥陀の絶対の慈悲というものを説く、阿弥陀様なんて何処にいる、いるかいなかわかりもしない、いい加減に思っているだけじゃないか、と云うような、始め話したような一種の反抗的な考え方をしていました。ところが母が死んだ。これは事実だ。一人の生命が、どうにもしようのない時、一人淋しく死んで行く時に、このまままで私は阿弥陀様の所へ行けるんだよ、心配しなくてもいいよと云った。この母が死んだ。これは事実です。その時に私は歎異鈔の「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらずべしと、よき人のおおせこうむりて信ずる他に別の仔細なきなり」この言葉を父から重ねて云われた時に、そうだなと思った。私は母と一緒に、母の道へ行こう、間違っていたっていい、それこそ「たとえ法然上人にすかされまいらせて云々」の御言葉です。間違っていたって私の母が行った道なんだ、その道を自分は行くんだ、と私は頂かせていただいております。

ほんとに一人ボッチだと思った私は一人じゃありません。うれしい時も悲しい時も必ずそこに母が、父が、阿弥陀様が、皆一つになって、それと一緒に暮す生活は一人じゃない。一人だけれど一人じゃないと私は思います。

ます。色んな明治生れの有名人がだん／＼亡くなる時期にはいつてあの人もなくなつた、この人もなくなつた。友達でもずん／＼亡くなる。こないだ私の中学の同窓生の会がありましてその通知が来ました。それによりますと百十人ばかりの卒業生の内もう六十人を越す物故者が出ている。その報に接します度毎に、色んな人の死を新聞紙上で見る毎に、雨が来る／＼、ホラあの尾根も、峽もけぶつてはや見えぬ、もうじき自分にも来るんだと云うような気になってそれを見る。でそう云う意味から思いますと、よく云われますように自分の人生というものもそろ／＼終幕へはいった、もうと／＼に終幕へはいった。よくわが人生を語るという人もあるし、しますが、私もそろ／＼そう云うような感慨を持つ年代にはいったと思うんであります。けれども、そこで私今日平常思っていることを聞いて頂くと思うのであります、一体人生ってどう云うものなのか、語れる我が人生というものがあるだろうか。あるにはあるだろうが自分にわかつてるだろうか。云う意味はどう云う意味かと云いますと、自分が生れてから今迄自分はこうした、そうした、こう云う事があった、ああ云う事があったと云う事はわかります。これは本当の表がわの皮だけでその中には自分でもわからないような本体がある。自分の人生に一つの事が出来た、その事が何故出来たかと云う

私どうも自分の思う事の自分の一も云えないんですが、そう云う私も今年でもうじき十月十日で満六十七になります。父より一年長生きしたわけです。ずい分生きたものだと思うんです。私は終戦後高知へ移りまして高原生活を六年ばかりやりました。高原をひらいて色んなものを作ったり、色んなものを売ったりする、所謂開拓者生活をした。そこは高原ですが、遠くにはより高い山がある。その時其処はズウ／＼と曇って来るんですが、ああ云う高原の雨というものはだんだん序々に曇って来てバラ／＼と降ると云うような雨も勿論ありますが、そうじゃない雨が多い。向うの方から雨が来るのがわかるんです。遠くの山へ来てる時は水煙でけむっちゃって雨が来るぞと思つてると十分位たつとザー／＼と来る。雨が来るぞそれ片付けろと云うんで家内総出で陸稲のわらを取り込んだり、干してる芋を取り込んだり色んな事をしたもんです。その時の事を私自分で口ずさんで

雨が来る来る ホラあの尾根も

峽(かい)もけぶつて はや見えぬ

と。この口ずさみを自分で書きまして額にして私の居間にかけて、時々家内と一緒にそれを見てるんです。それは高原生活の六年余というものを懐しむためにやってるんです、このごろその言葉が別の意味で私の心に響いてまいり

ことは、自分のつくつたものだけではなくて勿論人も一緒にあつてつくつたんだが、何故そうなつたかという本体はこの見えないところにある。とすると人一人一人の本体は人の気のつかないその中枢にあるんであつてその表面をさわつてに過ぎないのが所謂人間の説く人生に過ぎないと思うんです。で、そんな事はわからんでもいいじゃないかと云う考え方もあります。それならそれでいいんです。或はその表面のあり方をうまく運ぶ為に色んな智慧があります。考え方ややり方があります。だけどそれだけで人間が満足出来るかどうかと云うことはその人によると思ふんですが、それだけだったら人が自分の人生と云うものを振り返つた時に浅いものしか味わえないんじゃないかと思う。一つの絵なら絵、書なら書を見た時に、ああこれはいい絵だなと云うことは、それを感得する力があつて始めて味わえると思うんです。一つの書を見ていい書だな、いい句だな、いい和歌だなあと味わうにはそれを味わう能力があつて始めて出来ることです。人生の本当のうろおいと云いますか、美しさと云うか、或は味わいと云うか、それを味わうには、やっぱり表面だけでなく、その中に大きな自分のわからない、人おのがじしわからない人生の本体があるんだと、そこがわからなければ、誰も味わえませんけれどもそういうものがあるんだと云う事を知つて自分の人生を

見ると云う態度の有る無しによって私は面白い方が違うんじゃないかと思うんです。

で、そんなに云うと、何時もそんな風にして暮しているかと云われると頭をかくより仕様がな。私そんな生活なかなか出来ません。ただそう云うものであると云う事を知らせて頂いているだけに、時々そう云う風に心を向ける時を与えて頂きます。これが幸であると思うんです。ただしその道は決してそこに楽しみやよろこびだけが見付かりえません。そうする事によってその中に苦しみや淋しい事もある。併しその世界にはいつてからでないとは本当の人生問題の解決といふことは求め得られないと思います。その世界にはいった時に始めて「わが心のよくて殺さぬにはあらず」と云うお言葉がしん底から頂ける。「わが心のよくて殺さぬにはあらず」実にそうですよ。このごろ色々の事がある、このままではすませない、そのわが心のよくて殺さぬにはあらず、殺すべき業縁がないから殺さないんだと云うお言葉ですね。さるべき業縁があればどんなふるまいもすべしと云う聖人の仰せですね。それはどの世界で頂けるか。これが表面張力の上でアップ／＼している世界では、そんな馬鹿なことがあるもんかとしか云えないんです。そうじゃない、もう一步深いところにふれた時にそうだと頂けるんです。歎異鈔のお言葉ことごとくそうだと私は思うんです。ですから、その世界にはいった時にぴんと響く御言葉が「お前一人じゃないんだよ」という弥陀の声であり母の声

のところで違いがある。

であり父の声でありなんです。併しながら淋しいとか苦しいとか腹が立つとか云う事は、それを排除する事は人間だから勿論出来ません。けれども大部分の時オレは一人だからと思うからです。オレ一人だからと思うから誰一人わかってくれないからと思うから淋しくなるんです。その時、わかつてるよと云って下さる人が一人オレにはあるんだと信じる事、信じることは私は力だと思ふんです。ネ、一人でいいじゃありませんか、誰にも彼にもわかつてもらわなかつたって一人でいいじゃありませんか。そこに信仰のあゆみがあると思う。我々自身考えてもらんなさい、よく自分のことは誰も知ってくれないと不平云いますけれども、その自分はどうか云うものかと考えてもらんなさい。誤解をしてと腹立てますけどね、腹立てます時には自分が悪く云われた時なんです。いわゆる買いかぶられた時腹立てませんよ。けれどこれはやっぱり誤解じゃありませんか。誤解をされて怒るならよく云われた時も怒らなければならぬんだけれども、私なんかも池山先生なんか云われて何かするとヘラ／＼／＼／＼よるこんでる。内実何もありやしない、あるような顔してここへ出て来てる、いい気になって出て来てる。本当に自分というものを知ってもらいたいならば、人間はみんな本当は困るんじゃないでしょうか。その時さっき云った本体から響き出した言葉ですね。御声

歎異鈔第七章

花 田 正 夫

- ①念仏者は無碍の一道なり。
- ②そのいわれいかなとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし。
- ③罪惡も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに無碍の一道なり、と、云々

無碍と有碍

第一節の一行は非常に短い言葉であるが、真実信仰の真髓をあらわし、その真面目の躍如とした金句である。

さて、第一に念仏者とあるのを、念仏者（しゃ）と読むべきか、或は者を念仏は、と読むべきかについて色々論じられてゐるが、私は念仏者（しゃ）と教えられ、そのように読みなれてもおり、その方が人と法とがとけおうて、力づくよく実生活の上で味わうことが出来るのでそのように読んでゐる。

さて有碍（うげ）と無碍（むげ）についてかえりみると

界を越え、親類縁者のさしのべる手もととかなくなり、名残り惜しく思えども娑婆の縁つきで力なくして終るより外ない身に、仏の無碍の光明がさしそくて下さる、それは「さわりある身の上にこそ」照護して下さるのである。そこに

覚悟だに要なきまでにみほとけの

そだてたまひし恵み尊し

と無碍の徳光を謝していられる。死の覚悟を今さらにする必要もないまでに照護せられてゐることの驚きである。死を前にした重病の人に、覚悟をせねばならぬ、祈らねばならぬ、正念に住さねばならぬ等々の注文があったらたまつたものじゃない。業縁次第では如何なる死に様をするか知れない煩惱具足の凡夫を救済せんとの本願すでに成就して、何処々々までもお見捨てのないみ仏のましますことに満足させられてこそ、どうあると安心して行くことが出来るのである。

池山先生が六十になられた正月のお歌に

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

とある。「よかれと願って六十の春秋を重ねてきたが、苦が軽くなるどころじゃない、年と共に苦は増すばかりで

き、私共の生活はいたるところ碍（さわ）りばかりである。それも皆身から出た錆で、誰に訴えるところもない。そこに無碍の仏の心光が照りそうて下さり、さわりが仏力の自然として転成せられて、さわりでなくなり道がひらけるのである。

光雲無碍如虚空入光雲無碍にして虚空の如し▽

一切の有碍にさわりなし

光沢かむらぬものぞなき八光、身にふれて智慧出ず▽

難思議を帰命せよ。

と聖人は和讃でその仏徳の不思議を讃仰せられている。

臼杵祖山老師は、直腸癌で亡くなられたのであるが、その最後の病床にあって

碍りなくすべてを照らすみひかりは

さわりある身のうえにこそ照れ

と渴仰されている。碍りの中でも死病の苦に直面するのにまさるものはない、ことにあらゆる医術も妙薬もその限

ある。そうしたなかであって、歳旦若水をつかい、仏前に坐して念仏申した心を歌にしてみた。さるべき業とは、身にもつ業報だ、それは皆身から出た錆でのがれようのないものばかりであるが、それを受けて立つことが出来るのは内に念仏のたのもしさがあるから……と語られた。

私共は自業自得の結果と知りながらも、逃げたい、軽くしたいの心ばかりで、あせりもがいて、かえって苦惱を二重三重に増している、これ以上には出られないのが人の世の常である。それなのに「さるべき業はさもあらばあれ」と云えるのは、たのみ力になって下さる念仏にわが身が支えられているからである。

第二節は

そのいわれいかなとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。とある。

天神地祇の敬伏

天神地祇とは、天の神、地の神のことである。それは印度、中国、日本と夫々異なるものが無数にあるが、私の理解出来る範囲では、我々は天と地の間に居るが、その天を護り地を守って下さる神々と世間に云われている方々であ

ろう。

さてよく知られた歌にも

心のまことの道にかないなば

祈らずとも神や護らん

とある。さて心がまことの道にかなうとはどういうことであろうか。聖人が「虚仮不実のこの身」と仰言っている通り、私共には真の善悪を判断する智慧もなく、また一寸した親切らしい行いも相手の出方ですぐ崩されてしまうて末通らない。それではこの凡夫のまこととは、まことなき身ということ以外にない。このまことなき愚鈍の身も、仏力に転ぜられて氷が水に溶けるように、罪障を功德とかえて頂く時はじめてまことの道の光が射しそめるのである。そこに「祈らずとも神や護らん」のめぐみも自然にあるのであろう。

又、はてしない流転の海に本願の船にのせられる時、はじめて人間に生れた喜びがあり、人に物に、天にも地にも謝する心がおこり、天地の神々もまた敬伏して下さると信ずる。現世十益の中の、冥衆（めいしゅう）の護持をうけるの一端の味わいであろう。

一神教は他を排して自らを立てるが、絶対教は相手を生かすことによって自らも生きる。共生きの大調和の趣きがある。英国の歴史家トインビーが、仏教精神こそ世界平和

を招来する教であると云うのもその特徴を見出すからである。ろう。

魔界外道の障害

世の中に色々の魔を取り沙汰しているが、結局は内なる煩惱が外のものを縁として作り出した仮像である。仏教ではそのうち求道心をさまたげるものを悪魔としている。これはキリスト教でもそのように思われる。釈尊の三十五の降魔成道（ごうまじょうどう）になぞらえられるのは、キリストの荒野の試みであろう。

聖書によれば、ヨルダン河で予言者ヨハネによってバプテマス（洗礼）をうけたキリストが、荒野に出て四十日四十夜、飢え苦しんだ時、最初の悪魔は「汝もし神の子ならば石をしてパンにかえしめよ」とささやく時、「人はパンのみによって生きるに非ずすべて神より出する言葉による」と退ぞけ、次に「汝もし神の子ならばここより飛びおりよ、天使は汝をたすけん」とささやくや「我等の父なる神を試むべからず」と退ぞけ、更に「汝もし我に従わば、見ゆる限りの土地を与えん」とささやくと「我等の父なる神のみにつかえ、他に仕うべからず」と退ぞけ、悪魔は退散したとある。これ皆、人間の持つ大きな慾心や猜疑心の誘惑の仮像である。

釈尊には三十五の降魔が伝えられるが、菩提樹下に身心をととのえて、決死の端坐に入り給うた時、あらゆる悪魔が四方上下からその正体をあらわして成道をさまたげようとする。或は美女となり、或は妖怪変化の姿とあらわれるが、仏の放たれる円光の中に入ると、皆転じて仏を莊嚴するようになる、そこにキリストとの差は、悪魔と対立するのでなくて、悪魔を全理解する、すると悪魔が魔の働きをおさめて、そのところに安んじてくるのである。末通った大慈悲に害心がおのずと解消する妙趣である。

以上二つの場合みな煩惱が作り出した仮像が悪魔の正体であることには変りがないようである。ここに煩惱の始末が悪魔の根本の解消法となるので、或る人々はことごとくの煩惱を断絶しようとして真剣な修行をし、或は煩惱の淨化を志して捨身の求道を続ける人もある。

ところが我々自体が煩惱のかたまりで、丁度土器が粘土で出来ているようなもので、どんなにみがいても、砕いても出るものも残るものも粘土ばかり、所詮その道に絶望する外はなくなるのである。

そこにこの身の全体を理解して、おさめとって下さる方の慈懷によってのみ救われて、魔界もさまたげることの出来ないめぐみを頂ける。

次に外道（げどう）であるが、本来の仏教からいえば、

仏教以外の道ということである。現在では非常にさげすみ、ののしる時に用いられているが、それは本来の意味を失ったものである。

さて印度哲学によると仏教以外の教に九十五種あると詳しく分類されているが、私は大別して、有我の教と無我の教とに分けて、仏道と外道とのけじめにしている。

釈尊を慕って道友目蓮と共に舍利仏がバラモンの教を捨てて出家してほでない頃であった。舍利仏の叔父でバラモン教の長老であったマカクチャが、僅か三十そこそこで仏になったという釈尊をあなどり、問詰するために来た。

釈尊の前に老バラモンは端坐して一言も出さない、釈尊もまたじつと老バラモンを正視されたまま黙していられた。舍利仏は釈尊の背後にあって風を送っていた。しばらくして老僧は口を開いて

「ゴータマ、何をといても自分はことごとく否定する力がある」

と言うと、釈尊は即坐に

「すべてを否定し得る汝が、汝自身をどうして否定し得ないのか？」

と誠められると、老僧はかえす言葉もなく、そのまま仏弟子となっている。

この積尊の態度こそ無我である、そこには有我的立場の者の手は遠くとどかない、碍けをなすことは出来ぬのである。

私は歎異鈔の全体にこの無我のところがあふれているのに驚歎させられている。「本願を信じ念仏申すうえは、他の善もほしからず、悪をもおそれなし云々」又「親鸞におきては……よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」、「親鸞弟子一人も持たず候」、「親鸞もこの不審ありつるに唯円房同じころにてありけり」等々随所にその姿にふれる。

そこに私のような我慢の強い者も、本鈔の仰せの前に刃向（はむこ）うことが出来なくて、かえって仰せに信順せしめられぬわけにいかなくなる。無我な人の教えの前に有我的者の手はとどかないし、無我の教えこそ、時代の流れも消すことが出来ず、国境も人種の別もさまたげとはならぬ、そこに久遠のまことがさながらに現れ、尽未来際を照らす光ががやく。

第三節に

罪惡も業報を感じることをあたわず、諸善も及ぶことなき故に無碍の一道なり、と云々

とある。ここが人生問題の上で一番ありがたいところであ

る。というのも、我々の日常生活のほとんどが、よし、あしの連続である。

池山先生はある時

惨憺たる悔いののこせし一一の

あとかたもなき無碍の一道

と述べられ、それに加えて

「五十過ぎると時々眠れぬ夜がある。先達でもそうした夜にあたった。眠れぬままに過ぎ去ったことどもが心に浮ぶ。自分が当時若くて思いやりもなかつたが、ひどいことをして迷惑をかけた人々も心に浮かぶ、その中でもまだ生きている人々にはこれからということもあるが、すでに亡くなった人々のことになるとどうしてみようもない惨憺たる後悔ばかりである。そこに念仏がうかぶと、上海の激戦のあとの爆撃の惨状に似た後悔の傷あとが、打ち寄す波に洗われた海辺の砂浜のようにあとかたもなく洗われた。そのころを歌にしてみたが、これは過去の罪業に働いて下さる念仏無碍のはたらきである」と語られた。そしてまえに記した池山先生の御歌は、現在から未来にかけての無碍の味わいである。

聖人は「無碍というは、さわることなしとなり、衆生の煩惱惡業に碍（さ）えられざるなり」と知らせて下さる。

近角先生は「どんなに大きい氷塊も、太陽を凍らすことは出来ないで、やがて太陽の熱で氷の方が溶かされてしまうように、我等の煩惱惡業がどんなに深重であつても、やがて功德の水と転ぜしめられて本願をまかすことは出来ない」と仰言っている。

阿闍世王は父王を殺害し、やがて大慚愧に沈んだ時、仏弟子であり名臣であるギバ大臣に仏の教えをうけるようにとすめられるが「自分のような大罪人が仏前にどうして詣（もう）でることが出来ようか、大地が裂けて墮獄するであろう」と、心を堅く塞ぎして動こうとしない。

これが惡に怖れる我等の姿である。大臣と亡き父の教えに導かれてやがて仏前に詣でると、広大な仏心にあい、一切の罪業の苦から脱して大慶喜の人となっている。聖人は

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり 罪障おもしと歎かざれ

願力無窮にましませば罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば散乱放逸もすてられず

と、聖覺法印の唯信鈔から無窮無辺の仏力無碍を讃仰せられている。この廣大無辺の仏の大悲を聞かせて頂くところ、惡業煩惱をも氣にかけず浄土への旅をたどらせていただけるのである。

次に「諸善も及ぶことなし」とある。惡をおそれるから

善を欲しがる、善をほしがるのは惡がおそろしいからである、これは一枚の紙の表裏であるが、人々の性質によって惡をおそれる傾向の人と、善をほしむ傾向の人があるし、同じ人でも時に惡を、時に善を問題にすることもある。

然し、善と云い、惡といつても皆相對善惡の世界で、如来の御目にはそらごとたわごとの域を出ない。池山先生があるとき、囲碁の話をせられた。先生は有段者であつたが所謂ざる碁の人達が一生懸命になって、これが最善と思つて碁を打っているのを、傍で見ているとあふなくて見ておられない。それにつけても仏の心には、我々がこれが一番よいと思つてやっていることをどんなにか御心配下さることであろうか、と述懐せられた。こうした虚偽の善をどんなにはげんで見ても、水に描いた絵のようにむなしくなる。その如何とも為し得ぬ身に、それを呆れたまわぬ無碍光が照りそうて下さる。かくて太陽が出ると、ローソクもランプも電灯もその光りを失つて、同じ明るさに満たされる。又どんなに暗い闇夜も東天に太陽がのぼるとその暗さは消されて行く。

私は仏力の無碍を仰いで、それを色々の譬えをもってあらわして見たが、実はたとえるにものがない

心も言葉もおく及ばねば

覺えず御名をと見えこそすれ

と良寛さんが言いあてられている。

終りに思いあわせるのは、清沢満之師の法語に

「それは自分の責任であるから死んでおわびするといっておれば、生命がいくらあっても足らないし、またそれによって何の解決も得られない。唯如来にこの如何ともすることの出来ぬ責任をとって頂いてはじめて道がひらける……」

というようなことを仰言っている。厳密に省みる時、我々の力で負うことの出来る責任は一つとしてあり得ない。かといって無責任でよいと云うのではない、責任はあるがそれをはたし得る力の無さを知らされる。そこに、徒らに責任々々と言うのも行きつまりなら、無責任であるのも放逸無慚である。真剣に責任を追求して、しかもその無力さに泣くより外にない者にこそ、

「煩惱具足のわれらは、いずれの行にても生死をはなれることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり云々」

の本願のためしさに、夜明けさせて頂けるのである。

又、歎異鈔十三条には

「されば、よきこともあしきことも業報にさしまかせて

ひとえに本願をたのみまいらすればこそ、他力にてはさうらえ云々」

とも、また九条には、

「しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりとしられていよ／＼頼もしく覚ゆるなり」と聖人が御身に掛けて御導き下さるのである。

ゲエテの言葉

自分のところへ来る人を見て、その人の性質を知ることが出来ぬ。人を見抜くには自分がその人のところへ行かねばならぬ。

○ 天が青いということを理解するためには、世界を一周して見る必要はない。

○ 自分の身は小さく限られたものであることをよくわきまえた人は、もつとも完全に近い人である。

○ 鐘の響はいかめしいが、また人なつかしげに大気の中で振動するように、云い現された真理も、それに魂が添うて四方に伝播（でんぱ）して、何処かで共鳴を起すなら、それで沢山だ。

拝む家庭

北条惠実

私達は唯一人孤立して生きることが出来ぬ、自分以外の人や自然に囲まれて、それとの関係で生活している。そしてその基本となるのは家庭で、夫妻を単位とする。

ところで「人間の理解というのは実は誤解の集つたもので、その中の美しい誤解を恋といい、その誤解の実現を結婚という」と亀井勝一郎氏が書いているが、面白い言葉であり、又えぐった言葉だと思ふ。実際人間同志の理解などというものはよい加減なものである。かくて人間生活の基本単位となる夫婦生活も美しい誤解から生れたのであるから月日がたつにつれて次第にうわべの美しさがはげて、赤裸々な人間性がむき出しになってくる。

この赤裸々な人間性のぶつかりあう場の家庭が、夫婦道の完成か、なれ合いか、それとも破綻の分れ道になる。破綻は離婚ということになり、なれ合いは互いに不平を胸の中にくすばらせつつズルズルと不満の結婚生活を続けることになり、完成は家庭内外のあらゆる困難の嵐の中にも、堅く心と心が結ばれて、互いに敬愛し合いながら結婚生活を円満に成就して行くのである。

親鸞聖人は愚禿と名告られつつ結婚生活をせられましたそして恵信尼様との間に三男四女があった。聖人の御生涯

は、権力も、地位も、財力も持たれず、北陸から関東、そ

して京都へと転住せられた。したがって御家族も一家団欒というように、夫婦家族がみんなそろっておくらしになることもすくなかったようである。

聖人が京都に移られたのは六十歳すぎと伝えられているが、その後の京都のお生活は人生の辛苦を共にしてきた老夫婦が相寄り相扶けて琴瑟相和した幸を味わうのはそれからであるように、どうした事情か恵信尼様は一人北国に移つていられる、しかし聖人と尼公との間には強いつながりがあった。そのつながりは外ではなく念仏であった。

「親鸞夢記」や「御伝鈔」によると聖人は恵信尼を観音菩薩と心の奥底に念じておられたことが知れる、又「恵信尼文書」によると「あなたの父、聖人はただ人ではなく観音菩薩の生れかわりである」と、御子、覚信尼へ、聖人滅後すぐ書き送っていられる。これこそ夫婦生活の完成の妙境を念仏生活の中に見出される。

長い一生の夫婦生活で、一切の人間の待つ虚飾が払いのけられて、互に凡夫としての愚痴やら腹立ちの赤裸々な煩惱の生活を知り抜かれた中であって泥田に蓮華の花が咲くように、心の奥深く拝み合われる御姿を聖人の上に仰ぐことはそのまま私共の行くべき道を照らして下さる大きな灯炬である。

(北米サンデー別院月報、開光より)

あ と が き



京都 一道会 御案内

時・十月二十六日(日)午後一時
所・京都市右京区山田開町

浄住寺・樹原徳草師住

△道筋▽

京都駅より荅寺行バス

終点、下車南へ四丁

新京都、桂乗り換え

上桂下車、西へ六丁

白萩が小庭に咲き誇って池山先生の忌月を知らせてくれております。本号は一道会前に、先生の何時もくりかえされた歎異抄二章の御味いを掲げさせて頂き、なお、池山寿夫様の、拙庵の集いでお話下さったものを頂きました。慈光にあふれた先生御一

家の白道への旅姿を聞かせて頂きました。

「念仏者は無碑の一道なり」の歎異抄第七章は、池山先生が還暦をおむかえになった正月、

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

の御歌と共に私共に「この章がはじめて単なる言葉でなしに、血のかやうものとして味わうことが出来るようになった。ただ天神地祇ということは、概念としてはわかるが、実感としては感じられないがね」と仰言った時のことを心に浮かべながら、私自身の味わいを誌しました。私自身が先生の亡くなられた歳を迎えましたにつけて、今年はことに思い出がしきりであります。

樹原様も、胃の痼疾でお障りが多いと伝聞いていますが広い境内を御夫婦二人で、一道会の準備をして下さることを思いますと、申しわけないことばかりです。皆様の御参会をお待ち申上げます。

御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半、

一道会例会(名古屋)

市電、新郊通り一丁目下車、

東入ル三筋目左入ル二軒目。

○

毎月二十四日、午前午後、法話会。

昭和区小椋町。教西寺、

市電、御器所通り下車。市バス、

北山町下車、東半丁。

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

名古屋市南区駄上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷 人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番

郵便番号 四五七